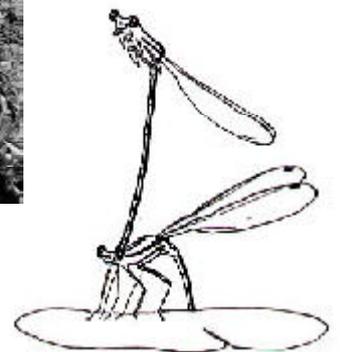


身近な自然



現地調査で古い蓮根田を見つけました。
でも周辺は切り取られ、一部しか残っていません。

No. 4
春号



「金沢市周辺の身近な自然」 紹介パンフレット作成中

「いしかわビオトープ交流会」では、現在金沢市周辺の身近な自然を紹介するパンフレットを作成しています。これは、会員のみなさまからのアンケート結果と現地調査をもとに、見失われがちな豊かな農村景観や、気が付かないままに消滅しつつある市街地の自然を掘り起こす作業をおこない、それらを広く紹介することによって、小さな自然の保全に役立てようという試みです。今回は特に金沢市とその近郊に焦点を当てることにしました。

金沢市の周辺ではまだまだ市街地の拡大や大規模な開発が進行しています。ここ数年間でも、

田上町のホタルの生息環境など、いくつかの豊かな自然が消滅しています。一方、森本の奥の山間などでは谷地田の放棄が進みつつあります。海側の平野部ではわずかに残っている古い用水路の人工化が進んでいます。このように、杜と水の都、金沢でも昔ながらの自然のビオトープが、次々と身近な場所から失われつつあります。

パンフレットは5月10日の総会(8ページ参照)においてお披露目できるように、現在、事務局と会員の有志により現地調査及び編集作業を急ピッチで進めています。

(交流会事務局)



里山には様々な生き物たちが生息しています。近年、里山は人が触れ合えるもっとも身近な自然として、また人と自然が持続的な方法で関係し、共存していくモデルケースとして注目されています。しかしその一方で、里山といった二次的自然は開発などにより急速に失われているのが現状です。また、このような量的な減少に追い討ちをかけるように、経済（燃料、肥料などの森林資源価値の低下）・社会的（過疎化）な変化が、里山を質的に大きく変貌させています。

里山の形態は多種多様であり、その地域の歴史、文化、人と自然の関わり方を反映していますが、1)そこに生息している植物、鳥、昆虫、両生爬虫類、哺乳類などの生き物たちはどのくらい異なっており、またはどのくらい共通しているのでしょうか？また、2)里山の量的、質的な変化は、そこに住む生き物たちにどのような影響を与えているのでしょうか？このような問いに答えることは、里山の現状を認識し、保全を含めた新たな人間 里山の関係を模索していく上で非常に重要です。

1)に答えるためには、様々な、できるだけ多くの里山を対象とした生物相の調査を行い、どの里山にどのような生き物（種類リスト）がどのくらい（個体数）生息しているかを調べていく必要があります。このような調査はインベントリー調査と呼ばれており、その調査結果からは生物の分布、生物の多様性が高い地域、絶滅に瀕した種類およびその生息場所といった保全的にとても重要な情報を得ることができます。

2)に関しては、量的、質的な変化を受けた（または受けている）里山において、生き物たちの経時的な変化を長期間（少なくとも数年間）調べることが必要となります。これはモニタリング調査と呼ばれており、ある生物種（特に絶滅に瀕している種）が減少しているのかどうかを調べるなど、これも保全活動には欠かせない大切な調査方法です。

「里山生物多様性観測年」（以下 SBOY）は、今年4月にスタートしたばかりの新しい調査計画です。SBOYでの調査は、調査者・研究者・市民の里山活動ネットワークが骨格となり行われます。植物、鳥、

昆虫、両生爬虫類、哺乳類などできるだけ多くの生き物を対象とし、調査年ごとにいくつかの対象生物を選びます。上記1)、2)のような問いに答えることは、この計画の重要な目的の1つです。科学的な要素を含んだ調査を軸に様々な活動を行っていく予定ですが、ここでは4月9日の検討会（いしかわ動物園）で提案された4つの調査案を簡単ではありますがご紹介します。

1. 落とし穴トラップを用いた甲虫相調査（インベントリー調査）

里山の二次林（竹林・スギ林・落葉広葉樹林など）を対象に、オサムシ、ゴミムシといった地上を歩行している甲虫類を落とし穴式のトラップを用いて採集調査。10地域の里山（珠洲、能登空港周辺、七尾、志賀、角間、金沢城公園、辰口、片野鴨池、刈安山、白峰村）を調査予定。

2. 水田・ため池の水生昆虫相調査（インベントリー調査）

甲虫、カメムシ、トンボなどの水生昆虫を捕虫網・トラップなどを利用して採集調査。5地域（珠洲、能登空港周辺、志賀、七尾周辺、金沢近郊、加賀市周辺）を調査予定。



H15年度のSBOY調査地（15地域）

3. 植物の花・果実の季節性の調査（インベントリー、モニタリング調査）

植物の花・果実は、昆虫、鳥、哺乳類などのとても重要な食べ物です。この調査では、様々な植物種をルートにそって定期観察し、いつどの植物がどのくらい花・果実をつけるのかを調査します。角間と辰口の2地域を調査予定。

4. 渡り鳥と果実の季節性の調査（次号にて紹介）

（田辺慎一（金沢大学自然計測応用研究センター））

私が最初にビオトープなるものに出会ったのは、今の学校に赴任した1年目の平成6年のことでした。当時は川の多自然型工法に関心があり、それらの本を読んでいる中で、ビオトープに出会ったのです。

これは、なにかおもしろそうだとということで、私が顧問をしていた地球環境同好会の生徒たちと手探りのまま作ったのが、1坪ほどの試作ビオトープでした。そして、それを基にして平成7年に作ったのが、今のビオトープとなります。当時はあまり資料もなかったため、造園学会や水環境のシンポジウムなどに出かけては、資料を集めていました。また、ビオトープ見学と称して、子供たちと清水市や岩倉市、横浜市などに出かけては水環境に関わる多くの方々と交流することもできました。なにせ、私は農業、それも造園が専門でしたので、水生植物や水生昆虫・動物など、まったくわからなかったのです。個体識別なども専門的な検索図鑑では難しく、もっぱら小学生用の昆虫図鑑を使って調査をしていました。素人たちが作って、素人たちが調査したビオトープだったのです。

そして、この研究が一区切りした後、こういったものが小学校にあつたらいいのになーという思いがあって、教育委員会や近隣の小学校に話をしたのですが、あの当時は全く反応がありませんでした。そのようなとき、本校のビオトープが新聞記事となり、それから多くの方が見学にこられるようになりました。そして、金沢市の事業として、小学校にビオトープが作られることになり、私もこの事業に参加させていただきました。この事業では、それぞれの専門家の方々や現場の先生、そして、PTAや地域の方々に参加して、様々な意見を出し合っただけでなく、ビオトープを作りました。この会に参加して、私自身たいへんよい体験になったと同時に、小学校ビオトープを作る大きな一歩になった気がします。

ビオトープには多くの方向性があるのですが、私はこのように小学校ビオトープにこだわりを持ってきました。それは、ビオトープに見学に来たある小学生の体験が基になっています。その子はようやく捕まえたメダカをバケツに入れようとして、それをぎゅっと握ってしまったのです。そして、バ

ケツの中で浮いたメダカを見て、驚いたように自分の掌を見つめていました。その子は自分の掌を見つめて何を考え、何を感じたのでしょうか。その「掌の感覚」が私は大切なのではないかと思っています。そして、その「掌の感覚」が大人になっても残るものだと思っています。この掌の体験への思いが、私を小学校ビオトープに駆り立てた一番の要因でした。

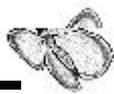
現在、翠星高校にはこのビオトープの他に、プールや噴水もビオトープ化しています。そして、近隣の小学生が採集や観察でやってきます。これらの小学生がいつでも気軽にやってこれるように、これからもビオトープに関わっていきたいと思っています。（交流会会員 蛭田 淳（翠星高校））



校内のビオトープ。敷地面積、約100㎡。今年で8年目となるこのビオトープは、ガマ・フトイ・セリ・ヒシ・ヒツジグサなどが茂る自然豊かな環境となっています。



プールや噴水のビオトープ化も進めていて、近隣の小学生たちの、身近な観察・採集場所となっています。



私達は四季の変化に富んだ国に暮らしていますが、人それぞれに美しいと感じる自然や思い出の自然があります。私の場合は、農家に生まれ家の前には田んぼや小川があったので、自然を相手に楽しい思い出がたくさんあります。父親が冬の間に竹を編んでつくったブツタイと呼んだ道具や、ソーケ、洗面器を持ちだし、川の中に入り魚を捕らえました。そのため、生き物と触れあえる水辺の風景を見るとワクワクします。秋は刈取った稲がハゾ(ハサ)に架けられると、学校帰りの道は黄金のトンネルになりました。そんな美しいと感じた風景も少しずつ変わっています。大規模圃場整備が進行中で、メダカやホタルが見られなくなりそうです。神社はフクロウが棲みコムラサキを採取する格好の場所でした。夜はオオミズアオが飛んできてガラス窓を叩きましたが、今では見られないかもしれません。

又、近くの山に入ると段々畑は竹藪になり、細い山道はスギの木が倒れて自由に歩くことが難しくなっています。山の田んぼは機械が入らないので一番先に放置されたままになりました。農業を取り巻く環境の変化や里山を支える人々の高齢化の進行が原因と考えられます。

人の息遣いと様々な生命の躍動が感じられる美しい里山を守るにはどうすればよいのでしょうか。生き物の空間を守るためには、いろいろな視点で考えなければいけないと感じますが、私が感じていることを4つの視点で述べたいと思います。

一つ目は、農業を支える環境を整えることが大切だと思います。里山の環境を守り続けてきたのが農業ですが、農業の形態が変わるとともに里山の環境も変わってきました。

農家で作られた作物が消費者に届くまでに様々な手が加わり、生産者1人に対してそれを取り巻く人が10人いるとも聞きます。農業の衰退を招いたのは、規制が多く農業をする自由や競争が少なかったためでしょうか。これからは、農家を継ぐ人が希望を持って仕事をする環境を整えたり、農業をやりたい人が農業をできるように、都市住民のUターンやIターンの受入体制の支援、農業経営の最低耕作面積の緩和などが望まれます。

最近は農村環境を活かしたグリーンツーリズムやエコツーリズムが話題になっていますが、都市住民と交流を図り農業体験、林業体験を通じて地域を活性化しようとする運動が始まっています。また河川流域内の上下交流を通して、同じ環境を共有していることを

学び、一緒に自然を守ろうとしている地域もあります。地域の農業や生活環境を守るために、農産物の地産地消運動や、スローライフ、スローフード運動に取り組んでいる地域もあります。里山を守り続けた人達が元気になり後継者を育成し、里山の恩恵を受ける都市住民や流域住民の協力を得ながら、里山を保全して行くことが必要になっています。このような取り組みに対して、ピオトープとして協力できることはたくさんありそうです。

二つ目は、里山の手入れが仕事として成り立てばいいなと感じています。

戦後一斉に植林されたスギは、花粉症の大きな原因であり、下枝打ちなど管理が行われず林床は下草が生えないため、山が崩れやすくなっているといわれます。木を売る値段より、木を切る手間賃が高いといわれ、山を管理する人が少なくなりました。里山の二次林は、薪炭林として利用されず、落葉を肥料にすることはなくなりました。

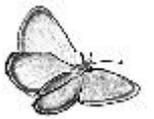
堆肥づくりや、間伐材をペレット化して固形燃料にするなど、森林の手入れが収入を支えたり、産業として成立することを望みます。我家の暖炉は、向こうの山の雑木林から燃料を買っているなんて言える時代がくるといいですね。木炭燃料は燃やしても森林で二酸化炭素を吸収することができるので、二酸化炭素を循環させることができるので、環境にやさしいエネルギーです。

モミ殻やヨシを暗渠材として利用しているところもありますが、いろいろな場所で自然材料を使う工夫をすれば、ヨシ原の刈取りや間伐などの仕事が環境を守ることに繋がると考えられます。

三つ目は、自然の復元事業では、生きもの環境を良く観察することが望まれます。

全国一律の指針やマニュアル重視の方法はやめて





欲しいのですが、地域性や立地条件により自然の内容は違うわけですから、地域の自然性を考慮した方法を探り、いろいろな工夫や試みを許す余地があっても良いと考えられます。専門家の指導も必要ですが、計画する人、施工する人にも、自然を観察する目を養って頂く必要があります。

新潟県の頸城村に日本自然学習実践センターがあります。このセンターは2.5haに及ぶ広大なピオトープや学習、研修、宿泊施設、自然環境の保全に関する様々な情報が備わっています。ピオトープ管理士会の研修も毎年ここで開催され、和歌山大学の養父先生をはじめとした先生方の講義と野外実習が行われています。

例えば、水辺にソダを設置する場合は、土留のためのソダと生き物が棲むソダの構造の違いを指摘され、タニウツギは枝が空洞なため半年ほどしか持たないことや、ソダ積みの積み方など細やかな指導を受けます。

又、生き物の生息環境の違いを良く観察するよう言われ、たとえばバッタは、裸地ではイボバッタが多く、10～20%の植被率ではトノサマバッタ、さらに植被率が高くなるとクルマバッタが多くなり、ピオトープでの密度の異なる草地の配置、管理への応用を学びます。



野外実習では、二次林の下枝打ちや草刈りを体験し、どのような刈り方をすると生き物に棲みやすい空間になるかを体験します。ここでも生き物環境を良く観察してから作業に入るよう言われます。

実際の生き物環境の整備・管理にあたっては、生き物に合わせた整備時期を選ばなければならず、現地の状況に合わせる必要があるため、計画通り行かないこともあります。生き物の状況をよく観察しながら柔軟に対応しなければなりません。

四つ目は、人材育成や市民参加の重要性です。

これからの街づくりや地域づくりは、地域住民の意見をより尊重したものの、さらには地域住民が自ら計画

したものを実行に移すことが増えて来ます。ある地域で農道の整備を住民がする例があります。生コンなどの資材は役所が提供し、工事をするのは住民です。少しガタガタであっても愛着がわく道になります。

里山の道づくりもボランティアの力を借りながら行われています。みんなで作った道を歩くのは気持ちが良く、道づくりそのものが楽しいと思います。

そのような住民参加、市民参加の事業では、参加者を集めるのに苦労したり、指導者が不足していると言われる。多くの人が里山管理に参加できればよいのですが、参加したくても出来ない人が多いのではないのでしょうか。仕事で忙しいサラリーマンにとっては、里山に出ることは気晴らしや運動になり、普段と違った人と出会える機会ですが、残業徹夜で疲れ果てているので休日は休養か家族サービスで終わってしまうのでしょうか。

写真は、2001年9月に兵庫県立人と自然の博物館で「兵庫県立有馬富士公園国際シンポジウム」が開催されましたが、その時にイギリスの環境保護団体BTCVのドミニク・ラム氏が里山保全活動・ボランティアの活躍を紹介し現地ワークショップで里山の道づくりを指導された時のものです。子供から大人までたくさんの方が参加していました。



イギリスのBTCVの活動では、グループの参加者はお互いに顔の知らない人達を組み合わせるよう考えられており、人との出合を楽しむことも考慮されています。

イギリスの例のように、ボランティアに参加する時は会社から出社と同等に認められたり、参加を重ねるほど会社や地域での評価に結びつくような社会の仕組みが日本でも育つことを願います。

最後に、人それぞれに里山との関り方があると思いますが、多くの方が里山の自然を楽しみ関りを持つようになれば、里山の自然もさらに良くなると思います。
(交流会会員 野村幸平)



圃場整備事業は、農業の機械化や一部農作業の効率化に貢献するものですが、排水路のコンクリート化や乾田化等によって、それまで生息していた田んぼの生きものが消滅することもあります。最近では農地における環境保全機能を評価する傾向が強まりつつあり、圃場整備の際に農地や付属施設の一部をゲンゴロウの池やメダカの水路にするなど、ビオトープを併設する傾向が見られます。今回は、能登地区での2つの事例をご紹介します。

1. 羽咋郡富来町町居地区の排水路整備

平成11年までに実施された県営圃場整備事業のなかで施行された事例です。所在地は、富来町のやや広い谷の中にある谷地田です。このあたりは、ホクリクサンショウオも生息する地域で、対象の谷地にも斜面林と細流といった本種の生息に適していると思われる環境がありました。ここでのビオトープは、排水路整備の一部区間をコンクリート化せず、水田側は板と丸太により護岸する、山側は護岸しない、底面の根固工はおこなわないといったものです。



丸太と板を使って改修された排水路

完全にコンクリート化されなかったことで自然の底質となり、よどみや緩やかな傾斜の水際もあり、両生類や水生昆虫、巻貝などの生育が可能な環境となっています。

一方、整備以前の現地の写真と比べると、圃場自体が盛土されて高くなり、また水路も排水が良くなるように多少掘り下げられているようで、水田と排水路の高低差が目立ちます。また、たぶんかつてよりは流速が早くなっていて、ホクリクサンショウオの産卵場となるには少し流れが早い感じがしま

す。また、山側に湾曲する部分などは、もう少し余裕を持たせて流路を確保すると、流れが緩やかになり生物の多様性が増すような気がします。また、ビオトープとした区間を除く上下流部は、コンクリートパネルを張り付けた三面張りになっているのが残念です。

2. 羽咋郡志賀町末吉地内の遊水池のビオトープ

これも県営圃場整備事業で平成13年度に施行されたものです。ここでは、排水路の一部を拡げて湿地と湛水池をつかった事例で、おそらく調整池のような機能も果たしているのでしょう。現地を訪れた時には地上部は枯れていましたが、湿生植物が良く繁茂していて、湿地としての良い条件が保たれている様子でした。水際は、ややゆるやかなスロープで、杭と丸太で護岸が施されています。湿地の部分は、蛇行した溝が掘られていて常に水がある状態になっており、小魚の生息が可能と思われます。このあたりはトミヨが生息する場所ですが、そのことを意識しての施工なのか、この湿地の部分は水路によって米町川とつながっています。また水路の部分は所々に、しみ出した地下水が流れ込んでおり、水質は比較的良好でした。

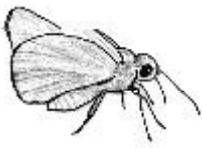
施工方法としてはおおむねよく考えられているようですが、丸太と板の部分が水上に出ているため腐り易く、今後のメンテナンスのことが気になりました。

最後に現地の情報をいただきました、石川県農林部の藤田英司様に感謝いたします。

(交流会事務局 高橋 久)



末吉地内の圃場の一画につくられたビオトープ



交流会メンバーの自己紹介コーナー



より広い自然と人のネットワークができるように 草光紀子

私は現在、いしかわピオトープ交流会で事務局を担当させて頂いています。

当会に係わるようになったのは、4年前にいしかわ動物園で開催された第1回目の「ピオトープ交流会」で、県より交流会の一部のを業務委託されたことがきっかけで、以来、「いしかわピオトープ交流会」でお手伝いをさせて頂いています。また、2001年には県より発行された石川県版の「ピオトープ作成マニュアル」の編集を担当し、県内でピオトープ造成に係わる方に取材をする中で、多くの方とお知り合いになることができました。現在ではほ場整備に伴うピオトープの設計、学校ピオトープの出張授業なども行っています。

今までピオトープに係わる方々と係わる中で感じてきたことは、多くの方は小さい頃に自然ということさえも意識せずに自然の中で遊んだ原体験が、ピオトープを保全したり復元したりする現在の活動に結びついているような気がします。

実際、自分の経験を考えると、小学校3～4年の間に高知の田舎で過ごした日々が、自然に対する愛着を深めた気がします。チョウやトンボの羽化を何時間もながめていたり、秋にはヒガンバナの咲くあぜ道をかけっこしたり、夜の河原で懐中電灯を照らしてクツワムシ採りに興じました。また近くの林で捕まえたコジュケイを飼ったり、近くの川では父に連れられてゴリやハヤをとったり、林の中を探検したりした30年たっても忘れられない懐かしい記憶があります。このような記憶が、今の私が自然に係わった仕事や活動をする原点になっている気がします。しかし、私の原体験はたったの1年10ヶ月で、多くの体験してきた方々に比べると実に少なく、「本来の身近な自然」「お手本にする自然」を肌で知らないもどかしさを感じることも事実です。

これを、現代の子ども達に照らしてみると、ますます本来の自然が失われてしまっている現代では、「お手本となる自然」を知らない子ども達が、本当のピオトープを復元することは難しいように思えます。事実、学校ピオトープでは庭園や箱庭のようなものをつくらしたり、水辺のみにこだわったり、生き物のネットワークや周囲の自然とのネットワークを考慮しないものになっている場合が数多く見受けられます。

ただ、私は学校ピオトープは本来の意味でのピオ

トープとは違った観点から見る必要があると思います。まず、学校ピオトープの目的は、作り上げて行く課程や子ども達の心を育てることにあります。そのため、ピオトープと呼ぶにはふさわしくないものができてしまう場合もあります。このようなものには、一言、二言助言を行えば良くなる場合もあるのですが、学校ピオトープを教育材料とする限り、本当のピオトープとは何かをどの段階かで子ども達が自分たち自身で気づいていくことや、試行錯誤しながらよりよいピオトープへと近づけていく課程も大切にしなければならないことと思います。そしてピオトープの学習に係わる中で、かつて数十年前に私たちが味わってきたような、自然の中での生き物の命のいとなみや、自然の息吹を肌で感じていけるものと思います。実際、小学校にピオトープの出張授業に行ってみると、子ども達に生態系の話をしても、ピラミッドの話をして子ども達はあまり興味を示しません。子ども達の目が輝くのは、生きている生き物を見せる時であり、生きている生き物の声を聞かせる時であり、生きている生き物にふれる時なのです。そういった輝きの中からの気づきや発見が、後には自然を理解し自然を保全することに係わるきっかけとなっていくものと思います。

当会には自然を研究する方、自然を利用する方、自然を復元する方など様々な立場の方がいらっしゃいます。観察会や交流会などを通して、多くの方々の原体験などを伺いながら、様々な立場でのご意見を尊重し、お互いの情報や意見の交換ができるよう図って生きたいと思えます。また外とのつながりも持ちながら、より広い自然と人のネットワークができるよう、微力ながらお手伝いをさせて頂きたいと思えます。



河北潟の観察会にて（左端が本人）

総会とシンポジウムのお知らせ

2003年度の「いしかわビオトープ交流会」総会は、5月10日に実施します。今回は、総会と合わせて、シンポジウム「加賀地域の身近な自然の現状と保全」を同日開催いたします。

このシンポジウムは、「金沢市近郊の身近な自然」紹介パンフレットの活動と連動したもので、加賀地域の里山や湿地で継続的に自然環境や野生生物の観察・調査をおこなっている方々をパネリストとして、各地の身近な自然の現状についての報告をいただくものです。加賀地域の里山等がおかれている現状と今後の保全活動のあり方等を、みなさまとともに総合的に検討する機会としたいと思っています。

またオプション企画として、会場となる河北潟「こなん水辺公園」での生きもの観察会をおこないます。多方面でご活躍の方々が多く、ご多忙のこととは存じますが、春空の下でのこの企画にぜひご参加ください。

いしかわビオトープ交流会2003年度総会

日時 2003年5月10日(土)

場所 こなん水辺公園(金沢市大浦町金沢競馬場西)

スケジュール

10:00 - 12:00

オプション企画「こなん水辺公園 生きもの観察会
造成されたビオトープ「こなん水辺公園」の
生物の様子を観察します。

13:30 - 14:00

いしかわビオトープ交流会総会

14:00 - 16:30

シンポジウム「加賀地域の身近な自然の現状と保全」
パネリスト

- ・加藤明宏さん(金沢ホテルの会)
加賀地域の里山についてお話しいただきます
 - ・本間勝美さん(森の都愛鳥会)
金沢市近郊のため池などについてお話しいただきます
 - ・白井伸和さん(地域植物研究会)
ワシタカの調査を通じたの里山の現状についてお話しいただきます
 - ・永坂正夫さん(金沢星稜大学)
湖沼・水辺の現状についてお話しいただきます
- なお、会場は畳敷きの部屋となっています。また総会を除いて、会員以外の方もご参加いただけます。お誘い合わせの上ご参加ください。

秋冷の河北潟観察会

河北潟は、「こなん水辺公園」の建設など、近年、水辺の再生事業が活発に行われるようになったホットな地域です。しかし、水路の整備や大規模な圃場整備も相変わらず進行しており、水辺の保全と復元を考える上では、さまざまな問題を提供してくれる場所です。

昨年(2002)の10月27日に、この河北潟で交流会主催のビオトープ観察会がおこなわれました。当日は、既に冬が到来したかのように、雨、霰、強風、雷と厳しい天候に見舞われました。あいにくな天候となりましたが、7名の方が集まりました。最初の予定通りに、「こなん水辺公園」内を観察しようと施設から出発しましたが、ピカッと雷光、大きな唸りとともに激しい雨が降り始め、数十歩進んだところで施設に走って引き返さなければならぬ、前途多難な始まりでした。結局、車2台で河北潟周辺をみてまわることになり、最初に「こなん水辺公園」の南にある木越・瑞樹団地へ向かいました。ここは団地の公園がビオトープとして整備されています。また団地内をとる水路には、かつて潟と集落をむすんでいた舟入川の名残があり、自然の状態で維持された水路があります。つぎに、瑞樹団地の北の大規模な圃場整備が行われていない水田を見ました。周辺の水田が嵩上げて乾田化を促進しているなかで、この地域は、周辺住宅地の洪水対策として、水田をあえて嵩上げしないままにしています。昔の面影が残されている場所です。その後車道から才田の圃場整備の現場を見て、津幡のアサザの生育するビオトープを訪れました。ここはもともと水路に自生していたアサザを、その水路の改修にあたって代替地として整備したところでした。このころには雨が上がりはじめ、最後に西部承水路のホテイアオイの大発生を見にいきました。外来種の影響の大きさをまざまざと見せつけられました。

(交流会事務局
川原奈苗)



ホテイアオイをとって見ているところ

「身近な自然」 No. 4 春号

2003年4月10日

発行所 いしかわビオトープ交流会

Email: biotopi@hotmail.com

事務局: 〒920-0051 金沢市二口町八58

Tel. 076-265-3323 Fax. 076-265-3435

北陸水生生物研究センター 気付